

ベラウ旅行報告

組原 洋

まえがき

以下に記すのは、1992年4月にベラウ（パラオ）を訪れたときの記録である。

この旅行には、妻・洋子と娘・慎子（小5）を同伴した。今回の旅行の主目的がベラウの生活を、できるだけありのまま観察したいということだったので、そのほうが好都合であると判断したためである。本稿執筆に際しても、同伴者の協力を得た。

1

3月30日出発の予定だったのが、エンジンが故障してグアムからの飛行機がやって来ないため欠航となり、4月1日午後12時30分、沖縄を発った。グアムを経て、同日夜8時前にベラウに着いた。空港では、大沢チヨ子さん夫妻の出迎えを受けた。今回は民宿に泊まりたかった。前2回訪れたときはいずれも、政治的関心が大きかったが、今回は生活を見るということに徹底しようと思い、適当な民宿を大沢さんに探してもらうことにしたのである。大沢さんの夫はベラウのアイライ部落出身である。89年に初めてベラウにいったときからのつき合いで、90年の夏には沖縄にも夫妻でみえたのに、正確な名前を今も知らない。ヨシロウおじさんと我々は呼んでいるので、ここでもそのように記そう。なお、これは今回初めて知ったことだが、大沢さんは小笠原の父島生まれなのだそうである。戦前ベラウで育ち、戦後、東京に引き揚げた後、またベラウにやって来て住んでいる。

大沢さん夫妻から花輪を首にかけられ、トラックの荷台でその香りをかぎながら、真っ暗な道の中を進む。空には星が輝いている。まず大沢さん宅に案内された。大沢さんたちは以前は、日本人会事務所に住んでいたのだが、現在はそこから出て、近くの一軒家に住んでいる。以前から日本人会は看板が2か所にあり、分裂状態のようだったのが、なぜか、どちらも看板をはずすということになった模様である。以前大沢さんたちがいたところは、これからスナックのようなものになるらしく工事中だった。工事しているのは、ヨシロウおじさんである。おじさんは本職が大工で、このことも今回初めて知った。

大沢さんたちの新居に着いていきなり話に出たのはゴルフ場建設のことである。日本企業が入ってこれからゴルフ場が建設される予定だということで、その土地確保に大沢さんは協力した側らしい。ベラウではベラウ人しか土地を所有できないから、その協力がいる。続いて、おじさんが言うには、ここでも海面が上昇しているのだそうである。低い島は沈んで行くのではないかと。海面上昇のことは日本でもニュースになっているから知ってはいたが、こうして現実のこととして話されると切実

な感じになってくる。おじさんはしきりに、文明が進みすぎたのだという。我々も深く同感したのであるが、ということは、大沢さんのおばさんとは立場が違うということになりそうである。おばさんのいうところによれば、これだけ観光客も来るのだから、ゴルフ場の2つや3つは必要だ、と。おじさんはそれには反対のようである。いくら農薬を使わないといっても海は汚れるだろう。ゴルフ場の建設予定地というのを実際に見に行ったわけでもないのに、どの程度まで進んでいる話なのかは明らかではないが、場所も決まっており、かなり具体的な話と思われた。

こういった話の後、10時前、これから泊めてもらう家に案内された。真っ暗なので、おじさんが懐中電灯をつけて先導したてくれたが、これはたんに暗いというだけでなく、暗いところでひたたくられることがあるからだということだった。

泊めてもらうことになった家は大沢さん宅からほんのちょっとの所で、商売で民宿をやっているのではなく、おじさんの親戚の家だということだった。家はコンクリートで新しく、清潔だった。すでに相当の年輩の夫婦と、そのお母さんが住んでいた。この家の一番奥の部屋を使わせてくれた。1日1部屋25ドルだということだ。シャワーで水浴びして、すぐに寝る。

2

翌2日、当初の予定では大沢さんたちの持っている無人島に行く予定だったが、大沢さんのおばさんが、けがした小鳥を踏んづけて殺してしまったそうで、それで遅くまで眠れなくて気分が悪いというので、おじさんがトラックで案内してあげよう、と。

コンチネンタル航空、国際電話局等を回ってから、以前調査の際に行った海岸ぎわの部落に行く。ここにおじさんの親友が住んでいて、母屋の前でボーッと座っていたが、日本語を話すこのおじさんの話では、日本軍がワニ博物館を作って、敗走する時放置したものだから、ワニが山の中に逃げて増え、夜は危なくて歩けないという。

それから、東急リゾートに行く。ここは私も初めてである。入り口の門のところに検問所みたいなものがあり、宿泊客以外入れないと思っていた。ここでビーチを見ながら、サンドイッチとジュースにしたのだが、おじさんの姿が見えなくなる。ビーチの奥のほうにいった見るとおじさんがいて、ビーチの先にある浜を見ている。おじさんは怒った顔をしていて、聞けばこのへんでは、以前はボウミみたいな魚が釣れたのに、リゾートになってからこの辺りの浜では漁ができなくなった、と。だから、こんなところで飲み食いしたくない、と。しばらく私と一緒に海辺を眺めてから、おじさんは、戻るには戻ったが、機嫌が悪かった。

その後、小学校に行った。妻が5年生の社会科の授業を参観してきた。この間におばさんは、タクシーで帰ってしまったようである。その後、博物館を回ってからおじさんが案内してくれたのは、知花さんというウチナアンチュの家である。妻が沖縄の人に会ってみたいというので連れてきてくれたのである。知花さんは大工だそうで、おじさんと同業である。誰もいなかったが、裏側がゆるやかな斜面になっていて、そこに張り出した板敷きのテラスに椅子が置いてあったので、それや、床に直接座って待つ。斜面にはいろいろな植物が植えてあり、鶏が遊んでいて、そして猫もいて、娘は全然退

屈しないで遊び回っていた。相当待っていたら、息子の真二さんと友人が、車で帰ってきた。2人とも真っ黒に日焼けしている。真二さんがくれた名刺を見るとLocation Services"LIGHTS"とあり、ダイビングの仕事をしているということである。友人は下田浩之という方で、真二さんと一緒に仕事をしていた、本土の人である。真二さんの両親は今、親戚が死んで、葬式に行っていない、と。真二さんたちは、最初は我々を警戒した様子で、さぐるような調子だったが、だんだんうちとけてくると、特に真二さんは別人のようにたくさん話をしてくれた。その時話してくれた内容は次のようなことである。

真二さんの両親は2人ともウチナーンチュである。真二さんが生まれたのがどこだったか、きかなかったが、とにかく、お父さんの仕事に合わせて真二さんもサイパン、ハワイと回り、チャモロ語や沖縄方言がしゃべれるのだそうである。高校は沖縄に戻って、中部工業を出た。それからベラウに来て、ダイビングの仕事を始めて8年になる。我々に問いかけるように、さぐるように、沖縄をどう思うかときいてくる。真二さんによれば、沖縄はもうだめだ、と。サイパンも同じようなものだ、と。で、ベラウにはまだ自然が残っているから、これを残したいのだ、と。確かに、ダイビングに来る人は、観光客でしかない人が多いが、しかし、中には本当にこの海が好きになって何度も来るようになる人もいる。そういう人を増やしたいと、熱っぽく話す。筋金入りといった信条の固さが感じられるが、同時に、奇妙なほど柔軟な感じもするのである。快いユーモアがある。確かに、こういう若い人を沖縄で見かけることはめったにない。であればこそ、海外に出ているのだろう。

下田さんは、東京生まれの横浜育ちということで、あちこち海外を歩いた後、ここに住んで3年。今、真二さんたちは8人で仕事しているということだった。

真二さんの両親が行っている葬式というのは親戚のおばさんとかだそうだが、とにかく、その人はその部落の酋長に近い血筋の人だそうである。今回も以前来た時と同じように、酋長という言葉がごくあたり前のように出て来た。若い真二さんも、ごく自然に酋長という言葉を使っている。

夕食は、大沢さん宅でカニが出た。大沢さん宅では、雨水を集めてろ過して飲んでいる。これはおいしい。

3

翌3日はロックアイランドにモーターボートで行った。これはツアーで、1人70ドル、昼食付きなのだが、客は我々3人だけで、個人でチャーターしたのと変わらなくなった。私としては、第2次大戦の激戦地で、多数の死者が出た、南のほうのペリリュー島に行きたかったのだが、大沢さんは、ペリリューには何もない、と簡単に退け、せっかく子供を連れてきたのだからロックアイランドに連れてってあげなさいというのである。どうも大沢さんのペースにはまってきたなあ、と思い始める。

しかし、ツアーはなかなかよくできていた。糸をたらし釣りをしながら無人島に近付いて行く。つき添いは、ベラウ語しか話さない青年が2人だが、だんだんうちとけてくるとほがらかに笑うようになった。さすがに釣りはうまい。私は将来ヨットを習って、沖縄から直接海外に出て行きたいという夢(幻?)を抱いているので、真剣にやってみたのだが、1匹も連れなかった。この分だと飢え死

にだな。無人島には他の会社のツアーのモーターボートもたくさん来ていて、ここで、飛行機で一緒だった人たちと再会する。ここで昼食後遊んでから、帰りは、岩がトンネル状になっているところにボートを止め、えさをばらまくと、たちまち様々な熱帯魚が姿を見せる。ナポレオンフィッシュも見えた。潜ってみると、近視の目にも、様々な色の魚が大量に見える。おばさんから頼まれた、しじみのような貝をたくさんお土産に戻ってくる。

ツアーは早めに終わったので、民宿で昼寝をし、大沢さん宅で夕食をいただき、また早めに民宿に戻ったが、この間も妻と娘は民宿の回りを歩いて、民宿のおじさん、近所の人たちとすっかり仲良しになってしまったようである。民宿のおじさんは、60歳前後と思われるが、日本式教育をしっかりと受けたようで、漢字も分かるのだそうである。インテリらしい。仕事は、貝で首飾り等を作っている。作業所が母屋の横にあり、娘がとりわけ興味を示した。この辺りは、コロールの中心街からすぐなのだが、メインストリートをはずれるとすぐに、部落といった感じの集落が出てくる。民宿のちょっと奥のほうに、大きな木を中心に広場のようなところがあり、そこが人々の憩いの場のようなのである。犬が人間の子供より大きい。日本でこんな大きな犬が放されているのを見ればこわいだろうが、ここでは何でもない。一緒になって遊んでいる。妻はここで、女子高校生たちの歌を録音していた。皆、とてもはにかみやである。こんな風景を、私も子供のころ松江市で経験した。妻は、夜も民宿のおじさんやおばさん、おばあさんの話を遅くまできいていた。おばさんやおばあさんは我々の手前の部屋にゴザを敷いて、ここで寝たり座ったりしている。

4

次の日、4日、妻が、昨夜民宿のおじさんからきいたマルキョクという部落（州）に行きたいという。何でも、ここで酋長が亡くなって、これから新しい酋長を決めるところなのだと、昨夜民宿のおじさんからきいたのだそうだ。大沢さんはここに住んでいたことがあるそうである。車で行けないことはないようだが、前に走った経験からすると、道がひどいし、目指す部落に行きつけるかどうかあやしい。モーターボートで直接行けるということなので、おばさんをお願いすると、あっという間に話ができて、11時半に出発した。昨日と同じ会社で、まけてくれて、180ドルということになった。

モーターボートなら楽、と思ったのは間違いで、こんなに揺れたのは初めてだ。バベルダオブ島の東側を北上して、1時間ほどで着いた。着いたのはいいが、港には人が見えない。いや、じっとしていれば来るからとモーターボートを運転してくれてくれたおじさんはいい、実際、しばらくすると車に乗って何人かやってきた。この人たちに、大沢さんのおばさんが用意してくれた現金入り封筒を渡す。確か15ドルか20ドルだったと思う。しばらくするとランドローバーに乗った青年が来て、どうやら入村許可が出たらしい。この、ランドローバーに乗ってきたジェフ・トーマスさんが案内してくるそうである。日本語は話さないの、英語で話す。ジェフさんは普段はコロールに住んでいるということだった。モーターボートのおじさんに見送られて出発する。走り出すとすぐに部落に入った。そして、昔のアバイ（集会所）、今のアバイ、酋長の館と次々に出てきた。酋長の館はさすがに立派

なものだったが、その前に小屋があって、そこに5～6名の女の人たちが集まって、かごづくりをしていた。日本語をしゃべるおばさんも何人かいて、コロールからやって来た人もいた。中に、酋長未亡人もいて、まだ若くて、子供たちも小さかった。ベラウでは人口抑制の意味もあって、年寄り若い女が結婚するという話をきいたことがある。何回結婚してもいいそうで、例えば、ヨシロウおじさんにしても、大沢さんとの結婚で3度目である。

ジェフさんは、それから、部落の墓に案内してくれた。目印程度の、簡単なものが多い。海が見渡せる山の上にある。それから、今建設中のアバイにも連れていってくれた。もともとそこにアバイがあったのだが、日本軍が撤退するとき焼いていったのだそうで、同じ場所にこれから3つのアバイを建築する予定で、その第1番目のが、骨格ができたところだった。人はいなかった。これはアイライ村などのより本格的なものなのだとジェフさんという。釘等をまったく使わずに建てる。写真は撮らないようにとあらかじめ注意を受けた。妻が、なぜかアバイの決議方式に特別な興味を持って、色々きいていた。ここの奥に歴代酋長の墓地がある。亡くなった酋長の墓には花輪が置いてあった。服喪期間は確か90日だとかといっていた。ここに1つ、外国人の墓もあった。それから飛行場にも行った。といっても、山の上に滑走路があるだけだ。ジェフさんの話では、日本人はここまで釣りをしに来るが、我々のような興味を持ってくる人はいないらしい。それでか段々説明も熱を帯びてきて、回る範囲も拡大して行ったようである。半ば冗談で、あなたが次の酋長になる可能性はないのかときいてみたら、ジェフさんのお父さんになる可能性もあるらしい。もしそうなら、ここは母系だから、ジェフさんははずれてしまうのである。その後、部落に戻って来て、小さな売店で缶のソーダを飲んだ。ジェフさんにも勧めたが、何もいらない、と。

港に戻ってくると、港のすぐそばにゲストハウスを建設中だった。なかなか立派なもので、州でつくっているということだった。港に着いて、モーターボートのおじさんと話しながら休んでいると、小型トラックがやってきて、乗っているおばさんが、あれ、日本人の顔をしているではないか。おじさんも日本人の顔。実際、日本人だった。最上さんという。建設中のアバイの彫刻を彫っているのがこの最上さんなのだそうです。写真撮影を禁じられたという、本当は取っていいんだよ、若い人はきどっているから、という。おじさんは民話などにも詳しいようで、妻が話を1つ、テープにとった。ベラウは分節社会だと思うが、今現在こんなにもはっきりした分節があるのは、何より交通が不便ということであろう。

陽が傾いて来た。帰りは風で大変楽だった。この日も大沢さんのところで夕食をいただいてから、民宿に戻って、支払いをすませた。

5

最後の日、5日は、日曜日だった。この日ぐらいいはレンタカーで自由に動いてみようと思った。我々はまず知花さんに会いたかった。そもそも、4日に知花さん夫妻が帰ってくるということで、ヨシロウおじさんが連れていってくれることになっていたのだが、おばさんがいうには、いくら電話しても知花さんのおじさんは不在と。この日も知花さんのおじさんは一日中留守でいないと。ともかく、

アイライ部落のアバイを妻と娘に見せるということで出発した。

知花さん宅は、アイライに入ってすぐのところで、途中寄ってみると、ちゃんというではないか。狭い島だから人間関係がごちゃごちゃしてやりにくいということはこれまでも経験して来たが、つまり、大沢さんと知花さんとは良くない関係なのだろうとピンときた。我々が来てから、大沢さん夫妻の間がだんだん険悪になってきたことには気づいていた。どうも、おじさんが我々を知花さんのところに案内したのがお婆さんの気にいらなかったらしい。2人は夕食のときも同席しなくなったのである。しかし、大沢さんのいないところでは、おじさんは我々にとても親しく話してくれるのである。大沢さんが我々に会わせたいと思う人と、おじさんが会わせたいと思う人とが全然一致しないようである。本当は、早くレンタカーを借りて、自分で動けばよかったかもしれないが、まあ、これ経験だ。しかし、お陰で、旧知の人々に会えなくなった。知花さんとは、アバイを見てから午後にも行きますからと約束した。何しろ、一日中いるというから。

アイライの古いアバイの管理人は私のことをおぼえていてくれた。妻は長時間、とても熱心に説教をきいていた。

昼食はパラオN I K K Oホテルでした。お土産も買い、それから、民宿に帰って荷物をまとめた。あいさつをすませてから、車で大沢さんの家に寄り、それから知花さん宅に行った。空港に向かって出発するまで、我々は知花夫妻と大変楽しい時を過ごした。おじさんは読谷、お婆さんは具志川の出身である。これまで転々と場所を変えて仕事をしてきたのは、旅が好きだからなのだそうです。ベラウは10年になる。私も、こういう人生を夢見ていたのだが。家がすてきにくつろぐ。娘は4匹の猫を相手に全然退屈しなかったようである。おじさんは、沖縄についてははっきりした意見を持っている。沖縄はばかだ、と。今の日本はカネがあって…だが、いつまでも続くものなのかね、と。今みたいなやり方だと、日本と共倒れになる、それでいいのかね、と。ベラウについてもいろいろきいたのだが、まとまったメモが残っていない。ただ、感じたのは、真二さんとは違って、ベラウについても冷静に眺めている。「パラオ人は欲はあるが、能力が足りない」といった意見のようだ。それぞれに意見はあり、人から、ああだこうだされるのは嫌いだ、能力が足りない、と。アメリカ式の教育で簡単にアメリカ化するものでもないだろう、と。奥さんは、次から次へと、庭にある果物を出してくれた。動きながらも、話はちゃんときいているようで、細やかな人と思われた。

暗くなって空港に着くと、大沢さん夫妻が見送りに来てくれていた。2人は、完全に戦争状態である。まいった。グアムには夜遅くつき、いったんイミグレーションをすませて出た後、空港のトランジットルームに朝までいた。そして、6日の昼前、沖縄に着いた。

6

今回の旅行で、今度の投票は11月だときいた。憲法改正を決める投票だという。それで、11月にまた行く予定にしていたのだが、都合がつかず、行けなかった。

しかし、投票は予定通り行われたようである。92年11月20日の朝日新聞に、これに関する記事が出た。さらに、93年1月5日の朝日新聞にも、この関係の記事が出ている。それらを要約す

と、おおむね次のような状況である。今回の投票は、憲法修正の是非を問うものである。憲法では、核の使用・実験・貯蔵・廃棄等に関して、国民投票での4分の3以上の承認が必要となっており、このため「非核憲法」とも称されてきた。これがネックになって、アメリカの核持ち込みを認める、アメリカとの「自由連合協定」が批准できずにいる。自由連合協定は、内政と一部外交権はベラウ側にゆだねるが、軍事・防衛権限はアメリカが持つというものである。その見返りとして、アメリカはベラウに対して50年間経済援助を約束する。自由連合協定が批准されないことからベラウはいまだに国連信託統治領で、国連信託統治領はここだけになっている。批准のための投票はこれまで7回も行われたが、いずれも4分の3以上の承認は得ることができなかった。そこで、今回、憲法そのものを修正する投票が行われることとなった。憲法14条2節によれば、修正案に対する投票数の過半数により承認され、および4分の3以上の州において承認されたとき発効する。11月4日の投票の結果は、修正案に賛成するものが61%余を占め、また、16州のうち14州が賛成したとされる。修正案は、自由連合協定に関する投票は過半数で決すること、および、自由連合協定の有効期間中は協定と矛盾する憲法条項は適用されないというものだそうで、つまり、非核条項を凍結するものである。また、同じ投票で、日系二世のクニオ・ナカムラ副大統領が大統領に当選したそうである。

自由連合協定批准のための投票は、今年2月に予定されている。新聞記事によれば、同協定が承認されるのは確実と見られているとのことだが、前回、第7回目の投票のときも同じようなことが言われていた。そして、承認されなかった。何が起こるか分からない、という感じが強くする。それは、政治構造が、アメリカ式の政府と、伝統的な部落との二重構造になっているところから来る。その、伝統的な部落の健在ぶりを見てきたものとしては、そう簡単にことは進まないのでは、という感じがする。

(1993・1・11 脱稿)